

次の「利他」に関する【文章一】、【文章二】を読み、あとの各問に答えなさい。なお、【文章三】については、【文章一】の筆者である中島岳志が、料理家・土井善晴との対談において利他についてやり取りをする中で触れている、志賀直哉作の短編小説『小僧の神様』に関してのあらすじと、主人公Aが鮎屋から去った後に続く一節である。

## 【文章一】

コロナ危機によって「利他」への関心が高まっています。

マスクをすること、行動を自粛すること、ステイホームすること……。これらは自分がコロナウィルスにかからないための防御策である以上に、自分が無症状のまま感染している可能性を踏まえて、他者に感染を広めないための行為でもあります。

いまの自分の体力に自信があり、感染しても大丈夫と思っても、街角ですれ違う人の中には、疾患を抱えている人が大勢いるでしょう。恐怖心を抱きながらも、電車に乗って病院に検診に通う妊婦もいる。通院が不可欠な高齢者もいます。一人暮らしの高齢者は、自分で買物に行かなければなりません。感染すると命にかかわる人たちとの協同で成り立っている社会の一員として、自分は利己的な振る舞いをしていいのか。そんなことが一人一人に問われています。

ロンドン大学教授のグレアム・メドレーは、ヨーロッパでコロナウィルスが猛威を振るった二〇二〇年三月に言いました。「あなた自身がすでに感染している前提で振る舞いなさい」――。

私たちは「巣ごもり」をしました。大切な人とも会えない。生きがいだった社会的活動も制約される。勉強も仕事も、思うように進まない。そんないらだちの中、「ソーシャルギフトサービス」(e-Gift)の市場が、若者を中心に拡大しました。高価な贈り物ではなく、日常のささやかな感謝を伝えるために、ささやかなギフトを贈る。スマホ経由でコーヒー一杯などのギフト券を贈る、いわば「ちょっとした贈与」が話題になりました。

若者を中心に、利他的な行為への関心が高まっているというのは、世界的に確かな傾向のようです。医療従事者や様々なエッセンシャルワーカーへの感謝の伝達行為も広がりました。寄付やクラウドファンディングなどに参加した人

も多いでしょう。これは大変重要な潮流だと思います。

## 利他の困難

しかし、一方で、「利他」には独特の「うさん臭さ」がつきまとうことも事実です。利他的行動に積極的な人に対して、「意識高い系」という言葉が揶揄を込めて使われたり、「偽善者」というレッテルが貼られたりすることがあります。結局のところ、利他的な振る舞いをすることで「善い人」というセルフイメージを獲得しようとする利己的行為なのではないかという疑念が、そこには湧き起こってしまうのです。

しかも利他行為の「押し付けがましき」は、時に暴力的な側面を露わにします。誰から贈与を受けたとき、私たちは「うれしい」という思いと共に、「お返しをしなければならぬ」という「負債感」を抱きます。うれしいんだけど、プレッシャーがかかるというのが、贈与の特徴です。もし、返礼をする余裕がない場合、二人の間には、次第に「あげる人」「もらう人」という上下関係が構築されていきます。「私はあの人を援助している」／「あの人からは一方的にもらってばかりだ」という双方の思いが蓄積していくと、ここに支配―被支配の関係が自ずとできあがっていきます。これが利他的な贈与の怖いところです。

(中島 岳志 『思いがけず利他』による)

〔注〕エッセンシャルワーカー：我々の日常生活を維持するために不可欠な職業に従事する人。

クラウドファンディング：インターネット上で自らがやりたいことを発表

し、賛同者から広く資金を集める仕組み。

揶揄：からかうこと。

## 【文章Ⅱ】

「主人公Aがある小僧を見かけた。その小僧は噂に聞いていた屋台の鯨がどうしても食べたく、ぱつと入ったのだが、一つ手にしようとしたときに屋台の主人から値段を言われ、それでは自分のポケットに入っているお金ではとても食べられないと、手にした鯨を戻して屋台を去っていった。それを見ていたAは、この小僧にたらふく鯨を食べさせてやりたいと思った。ある日、Aは所用で秤屋へ行くと、たまたまあの小僧がそこで働いているのを目にした。買った品物を運ぶ役をその小僧にさせるよう店に頼んで連れ出し、先日 of 屋台とは別ながらも、とある鯨屋へと連れて行き、小僧に食べさせてくれるよう前払いをして、Aは去ったのだった。のちに小僧は、あれは神様だったのではないか、と思い始める。」

Aは小僧に別れると追いかけられるような気持で電車通に出ると、そこへ丁度通りかかった\*辻自動車呼び止めて、直ぐBの家へ向った。

Aは変に淋しい気がした。自分は先の日小僧の気の毒な様子を見て、心から同情した。そして、出来る事なら、こうもしてやりたいと考えていた事を今日は偶然の機会から遂行出来たのである。小僧も満足し、自分も満足していいはずだ。人を喜ばす事は悪い事ではない。自分は当然、ある喜びを感じていいわけだ。ところが、どうだろう、この変に淋しい、いやな気持は。何故だろう。何から来るのだろうか。丁度それは人知れず悪い事をした後の気持に似通っている。

もしかしたら、自分のした事が善事だという変な意識があつて、それを\*本統の心から批判され、裏切られ、嘲られているのが、こうした淋しい感じで感ぜられるのかしら？ もう少し仕た事を小さく、気楽に考えていれば何でもないのかも知れない。自分は知らず知らずこだわっているのだ。しかしとにかく恥ずべき事を行ったというのではない。少くとも不快な感じで残らなくてもよきそうなものだ、と彼は考えた。

その日行く約束があつたのでBは待っていた。そして二人は夜になってから、Bの家の自動車で、Y夫人の音楽会を聴きに出掛けた。

晩くなってAは帰って来た。彼の変な淋しい気持はBと会い、Y夫人の力強い独唱を聴いている内に殆ど直ってしまった。

「秤どうも恐れ入りました」\*細君は案の定、その小形なのを喜んでいた。子

供はもう寝ていたが、大変喜んだ事を細君は話した。

「それはそうと、先日鯨屋で見た小僧ネ、また会ったよ」

「まあ。何処で？」

「はかり屋の小僧だった」

「奇遇ネ」

Aは小僧に鯨を御馳走してやった事、それから、後、変に淋しい気持になった事などを話した。

「何故でしょう。そんな淋しいお気になるの、不思議ネ」善良な細君は心配そうに眉をひそめた。細君はちょっと考える風だった。すると、不意に、「ええ、そのお気持わかるわ」といい出した。

「そういう事ありますわ。何でだか、そんな事あつたように思うわ」

「そうかな」

「ええ、本統にそういう事あるわ。Bさんは何て仰有つて？」

「Bには小僧に会った事は話さなかった」

「そう。でも小僧はきつと大喜びでしたわ。そんな思い掛ない御馳走になれば誰でも喜びますわ。私も頂きたいわ。そのお鯨電話で取り寄せられませんか？」

(志賀 直哉 『小僧の神様』による)

【注】辻自動車：タクシーの旧名。

本統：ここでは「本当」の意味。

細君：「妻」の意味。

【問1】【文章Ⅱ】の傍線部における、利他行為の「押し付けがましき」が時に露わにする暴力的な側面について、あなたの考えを、これまでに見聞きしたり自身が経験したりしたことに基づき、二〇〇字程度でわかりやすく説明しなさい。

【問2】【文章Ⅱ】において、なぜAはBに対して、小僧と会ったことを話さなかったのか、その理由を、【文章Ⅱ】の本文中の言葉を用いて三〇字以内で説明しなさい。